

釜ヶ崎近況



資料
朝日ジャーナル
9. 20

「ここは解放区」。

黒マジックの文章が躍っている。大阪市西成区釜ヶ崎の西玄関に当る新今宮駅。その高々架の階段を降りきったところにある太い四角のコンクリート柱に。落書とみてしまえばそれまでだ。だが、ここに住むべくには、落書として見すごせない意味をもって迫る文字なのだ。

解放区があるのは、非解放区があることだ。また、解放区が非解放区より比較上せまいことだ。ここ釜ヶ崎についていえば、いわゆる「市民社会」に対して独自の性格を形成する狭小な一地域ではある。またここは現在、「市民社会」に必要な条件のいくつつかからは「解放」されているかみえる。解放区的表面現象は、たしかにある。だが、ついせんだってぼくが偶然目撃した小事件は、どうだろうか。

一〇月開業予定で内装工事を急いでいる「愛隣総合福祉センター」前の路上であった。サイコロ三個を使う四・★

★五・一賭博に、十数人の労働者が群れていた。早朝である。彼らのなかに、タオルのねじりハチマキ、うすよごれたシャツに作業ズボンなどで変装した刑事二人がまじって、賭金がそろって、粗末なツボが振られようとしたとき、胴元と張り手の計四人を現行犯逮捕した。アツという間だった。残った労働者の間で、「あんなカッコしなくてもデカなんやなあ」というささやきが、ため息とともに交わされた。

釜ヶ崎のある公共機関に勤めている友人から、ぼくはこんなことをきいていた。——「なんやかやと外から来た連中がビラや機関紙を出しとるようやけど、労働者の手に渡る前に警察がそれを持つとることがよくあるんやで」。まだある。ことしの六月安保闘争より前に、釜ヶ崎を受持つ西成署と管内の交番の窓に、金網が張りめぐらされた。ぼくはまず、投石よけに六月闘争学生対策、と感じた。ところが改めて観察すると、隣接する阿倍野署管内の、昨秋赤軍派学生に襲撃された二つの交番は、きれいに改装されたまま金網はない。金網は学生対策ではなく、釜ヶ崎対策なのである。つまり警察は、ことしの釜ヶ崎に、金網を張らねばならぬ何かを感じているのであろう。

新今宮駅は、最上階は南海電鉄の特等車とまる主要駅である。その下は国電栗状線の駅。南海の路面電車がとまる南園町駅もある。また地下鉄は御堂筋線と堺筋線がすぐそばの動物園駅で結合する。市バスも、一〇を越える路線がここへ集中している。

これほど釜ヶ崎は交通上の主要なポイントなのだが、ターミナル状況はない。単なる乗換え場所、通過するだけの場所。地上にも地下にも、乗客を誘いこみ足止めしようという動きがない。なぜだろうか。

一方でドヤのマンモス化、木造から鉄骨鉄筋への半永久化が急ピッチで進んでいる。それは、巨大な愛隣総合福祉センターの建設とともに、釜ヶ崎の永久化、固定化を証立している具体物である。そして釜ヶ崎が釜ヶ崎でありつづけるためには、なまじターミナルとしての新生面を持つことはない。持つてはならぬということではないのか。

愛隣総合福祉センターは、求職求人斡旋から入院設備をもった医療や、一部の家族持ち労働者の居住まで兼ねた施設で、すでに医療面では通院患者の受け付けをはじめている。求職求人は、いまの港職安西成出張所(港湾・失対)と西成労働福祉センター(土木・建築・港湾・製造など)に分れているのをセンター内に集める。そうなる、もつとも釜ヶ崎的「だった路上での求

人求職斡旋の業務は、「寄り場」と通称されてきた新今宮駅前の広場からセンター構内に移されるわけである。現実には、一〇〇台ではきかぬ求人バス、数千人の求職労働者を、センター構内でさばきされるものかどうか疑問だが、それはひとまずおくとしても、公式にも通用している「寄り場」、つまり労働者の自発性を意味したことは、あきらかに「寄せ場」になっしまう。そしておそらくは、求職に際していま労働者が多少なりとも保持している選択権は、建物の機能上の制約だけからも大幅に奪われるに相違ない。「ポスト万国博の需要減退は避けられず、土木、建設など一部の業種では、すでに不況のきざしもみられる」(住友銀行が六月発表した「万国博・中間決算」から)。

予想される不況に際して、釜ヶ崎がになわされる役割が、資本にとっていま以上に温順に機能する予備労働力集積場であるとすれば、警察力強化、寄り場から寄せ場への封じこめ温存策によって、表面的な「解放区」性すら早いうちに切除しにかかるのは、当然のことかもしれない。

「解放区」は、幻想としてのみ存在するしかないであろうか。

(珠)

工人公語